

歎異抄 序

【現代語訳】

ひそかに愚案を回らして、
ほぼ古今を勘ふるに、先師
の口伝の真信に異なること
を歎き、後学相続の疑惑あ
ることを思ふに、幸ひに
有縁の知識によらずは、い
かにか易行の一門に入るこ
とを得んや。まつたく自見
の覚語をもつて、他力の宗旨
を乱ることなかれ。

わたしなりにつたない思いをめぐ
らして、親鸞聖人がおいでになつた
ころと今とをくらべてみますと、こ
のころは、聖人から直接お聞きした
真実の信心とは異なることが説かれ
ていて、歎かわしいことです。これ
では、後のものが教えを受け継いで
いくにあたり、さまざまな疑いや迷
いがおきるのではないかと思われま
す。幸いにも縁あつて、まことの教
えを示してくださる方に出会うこと
がなかったなら、どうしてこの易行
の道にはいることができるでしょう
か。決して、自分勝手な考えにとら
われて、本願他力の教えのかなめを
思い誤ることがあつてはなりません。

よつて、故親鸞聖人の
御物語の趣、耳の底に留
むるところ、いささかこれ
を注す。ひとへに同心行者
の不審を散ぜんがためなり
と云々。

そこで、今は亡き親鸞聖人がお聞
かせくださったお言葉のうち、耳の
底に残つて忘れられないものを、少
しばかり書き記すことにします。こ
れはただ、同じ念仏の道を歩まれる
人々の疑問を取り除きたいからで
す。